

## 前略、市史編さん室より

先日市史編さん室へ「指宿市温泉熱利用園芸農業協同組合」の創立10周年記念誌と当時の写真が提供されました。発行は昭和37年12月。記念誌の表紙には「御幸千成」という一口ナスの写真が掲載されていました。

大正から始まるその歴史をひもときます。



泉熱栽培の歴史や組合の概要が記録されている記念誌

## 温泉が生んだ高級食材

「その昔、指宿では温泉の熱を利用して一口ナスやメロン・スイカなどを作っていたんです」と語るのは、資料提供者の渡瀬貴久さん（湯之里）。「同級生がメロン目当てで、よく遊びに来ていました」と笑います。

なかでも、一口ナス「御幸千成」は指宿の特産品として有名だったそうです。直径3センチほどのコロんとした愛らしい姿、深紫の高貴な色艶から、縁起物として重宝され、高級料亭などでも出されていたそうです。「年末には、暑いハウスの中で正月用の出荷を手伝っていました」と懐かしそうに話してくれました。

## 湧き出る温泉もったいない

指宿の温泉熱を利用した園芸は明治時代にさかのぼります。創立10周年記念誌などによると、その発案者は玉利喜造博士。もともと温泉熱の農業利用に熱心だった博士は、明治43年に鹿児島高等農林学校（鹿児島大学農学部の前身）の初代校長に就任すると、泉都・指宿に着目します。

いたるところに湧き出る温泉を農業に活用すべきと訴えると、その熱意に答えた指宿村当局は、大正7年に十町弥次ヶ湯の地を買収して学校に寄贈。翌年には、試験場（現鹿児島大学指宿植物試験場）が開設されナスやキュウリなどの試作をはじめました。大正13年には各種試験が完了。自然エネルギーを活用した新たな栽培法の幕開けでした。



平成10年ごろの「いぶすき味のふるさと便」パンフレットより

## 世界に広めた実践者外村亀吉

この技術を単なる研究で終わらせなかった立役者がいます。渡瀬さんが案内してくれた湯之里3号公園にはその人、外村亀吉翁の顕彰碑が建っていました。



昭和28年、顕彰碑と外村亀吉翁。組合の解散に伴い公園内に移転

アメリカ帰りで先見の明があった外村翁。試験場の成功をうけて、民間人として初めて一口ナスなどの泉熱栽培を手掛けます。近くの農家と力を合わせて、増産を図り、共同出荷体制を確立。

翁の情熱は実を結び、昭和15年には一口ナス約400万個を生産。国内はもとより中国や朝鮮半島へ出荷したのです。

## 戦後の再会と途絶えたバトン

アジア・太平洋戦争が始まると、高級品とされた一口ナスの生産は中断。食糧難から、泉熱はサツマイモの育苗や製塩に利用されますが戦後の復興とともに、生産を再開。各産地として返り咲いたのです。

その後、一口ナスは生産者の高齢化や需要の変化から、昭和56年をピークに生産量が徐々に減少。組合は平成14年に解散し、一時代を築いた「御幸千成」も途絶えたと言われています。

1冊の本と写真から振り返る指宿の歴史。皆さまのお手持ちの資料もぜひお見せください。ご協力よろしく願いいたします。



創立10周年の記念式典での写真。外村亀吉翁や当時の末吉敬治市長の姿も見える

## 指宿市の古い資料や写真などの情報を集めています

ご自宅にある古いものが大切な資料かもしれません。情報がありましたら、ご一報ください。

2次元コードからも連絡できます



問総務課 市史編さん室 ☎080-8210-1656